

## 『他人を見下す若者たち』の性格的特徴

— 仮想的有能感と 5 因子性格検査の関連 —

### Personality Characteristics of Adolescents Undervaluing Others

— The Relationship of the Assumed-Competence to the Big Five —

鈴木 有美

愛知みずほ大学人間科学部 (非常勤)

Yumi SUZUKI

*Department of Human Sciences, Aichi Mizuho College (Part-Time)*

Following the recent notice of Assumed-Competence conceptualized as undervaluing others in order to describe well contemporary adolescents' behaviors, the present study elucidated its relationship to the Big Five dimensions of personality. Two hundred and forty-two undergraduates rated themselves on the measure of assumed-competence, self-esteem, and personality. Preliminary examination clarified that a tendency of undervaluing others positively correlated to Openness while negatively correlated to Agreeableness of the Big Five. In addition, the participants were classified into 4 competence types based on crossing scores of the Assumed-Competence and Self-Esteem scales: atrophic, self-esteemed, omnipotent, and assumed. Those who were categorized in assumed competence type rated the highest on Neuroticism and the lowest on Agreeableness and Conscientiousness, which was the opposite pattern of self-esteemed type. They exhibited no significant difference from those in atrophic type, but higher on Neuroticism while lower on Extroversion than those in omnipotent type. Discussed are some issues for future research in terms of personality characteristics exerted to enhance the quality of their social and occupational life, and then to improve their own well-being.

**Key Words:** assumed-competence; self-esteem; personality; adolescents.

#### 【目的】

「まったく最近の若者ときたら…」という大人たちの苦言は、いつの世にも聞かれる。社会が変われば、そこで生活する人間の思考や行動パターンが変化していくのは、その社会に適応するためにある意味当然のことだといえる。しかし、現代の日本においては様々な面での自由化が進み、それに伴う個人責任が声高に叫ばれるようになって、個人主義、成果主義、“勝ち組・負け組”といった表現に代表されるような競争意識が

昂じてきた。転じて、自分自身ばかりに注意が焦点化し、自分さえ良ければ他人のことはどうでもよいという利己主義を憂う声が多く聞かれるようになった。

このような厳しい競争社会の中で体面を保ち、個性を主張する術として、速水 (2006) は新しい時代の変化を最も敏感に受ける青年層が“仮想的有能感”を抱くようになってきていると、著書『他人を見下す若者たち』の中で指摘している。仮想的有能感は、“自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に

評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚（速水・木野・高木, 2004, p.1）と定義される概念である。すなわち、実際の成功経験や社会的承認に基づいた妥当な肯定的自己評価（自尊感情）から生じる有能感とは異なり、過去の経験には左右されない。また、現実にはそれほど多くの成功経験をしていないにもかかわらず、自己評価の甘さから自己を過大視することで得られる自己愛的な有能感とも異なり、他者を過小視することで相対的に自己評価を吊り上げて得ようとするものである（速水・木野・高木, 2005）。

人は、誰しも肯定的な自己評価を維持したいと望む。自分を否定的に捉えたまま、心の安寧を得るのは難しい。しかし、価値観が多様化したといわれて久しいものの、世の中は誰しもが成功し、満足感や有能感をもたらしてくれるようにはなっていない。それどころか、何をもって成功とするかの基準は曖昧になり、他者からの評価も得にくくなっている。青年は、“自分らしさ”を求めようとすればするほど周囲の動向に敏感にならざるをえず、結果的に多くが認める価値に自分を合わせなければ“勝ち組”に入れないという葛藤を抱えることになる。香山 (2004) は、“バカ”だ“負け組”だと評される不安を抱えるが故に、先に他者をそのように評することで自らがそうではないと安心しようとする若者像に言及している。仮想的有能感は、現実には満足感や有能感が得にくい現代社会において、他者を軽視し、批判することによって得られる、自我防衛的な意味合いを持つ偽りの有能さの感覚である（速水他, 2004, 2005）。

どのような人が、他者を見下すことによって有能感を得ようとするのか。特定の性格的な特徴と関連するといった傾向はみられるのであろうか。これまでの研究において、16PF 人格検査との関連を検討した山田・速水 (2004) は、情緒不安定で不安感が高く、現実的で猜疑心が強い者ほど他者軽視傾向が顕著であることを明らかにしている。また、高木 (2006) は YG 性格検査の協調性のなさ、攻撃性の高さ、神経質傾向などを測定する下位尺度が他者軽視傾向と関連することを見出し、他者軽視傾向が社会生活において問題となる可能性を指摘している。

ただし、他者軽視傾向は実際の成功経験や自信とは独立であることから、自信がないにも関わらず他者を見下す者もいれば、自信があるからこそ他者を見下す者も存在すると考えられる（速水他, 2004）。そのため、速水 (2006)、速水・小平 (2006) は典型的な仮想的有能感を持つ個人を抽出すべく、他者軽視傾向と自尊感情の高低を組み合わせた有能感の 4 類型を提案している (Figure 1 参照)。そして、他者軽視傾向が強く自尊感情が高い“全能型”、他者軽視傾向が強く自尊感情が

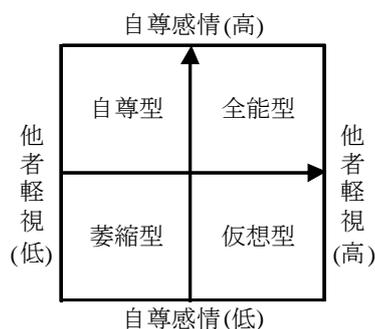


Figure 1 有能感の類型 (速水・小平, 2006)

低い“仮想型”、他者軽視傾向が弱く自尊感情が高い“自尊型”、他者軽視傾向が弱く自尊感情が低い“萎縮型”のうち、仮想型に属する個人を仮想的有能感を有する者の典型として扱っている。したがって、仮想的有能感と性格特性との関連を検討する際には、有能感を四つに分類し、仮想型に着目すべきであると考えられる。

また、性格特性論において、16PF 人格検査や YG 性格検査が開発された 1940～50 年代には、基本的な性格特性は 12 あると想定されていた。しかし、この仮定はこれまでの間に様々な批判を受けている（村上, 2005）。現在では、五つにまとめられるとする“ビッグ・ファイブ仮説”あるいは“5 因子モデル”がコンセンサスを得ており、“神経症傾向 (Neuroticism; 情動性、情緒不安定性とも訳される)”“外向性 (Extroversion)”“開放性 (Openness; 遊戯性とも訳される)”“調和性 (Agreeableness; 愛着性とも訳される)”“誠実性 (Conscientiousness; 統制性とも訳される)”の五つが基本的特性次元とされている。日本においても三種の質問紙性格検査が翻案、標準化を経て出版されており、大野木 (2004) がこれらの比較検討を行うなど研究が進んでいる。また、短縮版の作成（藤島・山田・辻, 2005; 下仲・中里・権藤・高山, 1999）や語彙アプローチによる質問紙の開発（村上, 2003; 和田, 1996）など、実施の利便性も向上している。したがって、本研究では 5 因子性格検査を用いて仮想的有能感との関連を検討し、他者を見下す若者たちの性格的特徴に関する知見の積み重ねを目的とする。

## 【方法】

### 調査対象および手続き

大学生 242 名（男子 77 名、女子 165 名；平均年齢 18.78 歳、 $SD = 1.01$ ）に対して質問紙調査を実施した。倫理的配慮として、調査目的は一般的傾向を研究するために行うものであること、データは統計的に処理されるため個人の回答が特定されることはない旨を調査用紙の表紙に明記し、配付する際に調査結果を研究目

的以外に使用しないこと、自由意志による参加のため非協力による不利益を一切被らないことを口頭で伝え、無記名式で回答を求めた。調査用紙は講義時間内に配付・回収され、回答のみ各々が自宅で行った。

**調査内容**

本論文で分析対象とした測度のみ以下に記載する。

**仮想的有能感尺度** Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan (2004) による仮想的有能感尺度 (version 2) の翻訳版 (速水他, 2005) を用いた。“自分の周りには気のきかない人が多い”, “他の人の仕事を見ていると、手際が悪いと感じる”等の他者批判や他者不信といった形式による他者軽視傾向を測定する 11 項目からなる。“全く思わない”から“よく思う”までの 5 件法で評定を求めた。

**自尊感情尺度** Rosenberg (1965) による自尊感情尺度を邦訳して用いた。“少なくとも人並みには、価値のある人間である”, “色々な良い素質 (才能) をもっている”等の肯定的な自己評価を測定する 10 項目からなる。“あてはまらない”から“あてはまる”までの 5 件法で評定を求めた。

**5 因子性格検査** FFPQ 研究会 (2002) によって改訂された検査の短縮版 (藤島他, 2005) を用いた。緊張や抑鬱といった要素特性からなる“情動性”, 活動や支配といった要素特性からなる“外向性”, 責任感や計画といった要素特性からなる“統制性”, 協調や信頼といった要素特性からなる“愛着性”, 進取や奔放といった要素特性からなる“遊戯性”の五つの下位尺度 (各 10 項目, 計 50 項目) から構成される。“全くちがう”から“全くそうだ”までの 5 件法で評定を求めた。

**【結果】**

**尺度の構成**

それぞれの尺度の構成は、全て原典の尺度構成を採用した。各尺度の信頼性を検討したところ、 $\alpha = .75 \sim .84$  と十分な内的整合性が確認された。また、各尺度得点の分布に大きな偏りや外れ値はみられなかったため、ここで算出した下位尺度得点を今後の分析に用

いることとした。各尺度得点の平均値、標準偏差、 $\alpha$  係数を Table 1 に示す。

**Table 1** 各尺度の記述統計量

	項目数	M	SD	$\alpha$
仮想的有能感	11	30.48	6.93	.82
自尊感情	10	29.43	7.21	.84
5 因子性格				
情動性	10	34.07	6.85	.80
外向性	10	30.83	7.07	.83
愛着性	10	34.49	6.02	.80
統制性	10	30.56	6.34	.79
遊戯性	10	35.53	5.93	.75

**尺度間の関連**

尺度間の関連について相関分析を行った (Table 2)。仮想的有能感と自尊感情の関連については、 $r = .08$  (*n.s.*) と無相関であることが本研究でも確認された。

仮想的有能感の 5 因子性格検査との関連については、遊戯性とは正に ( $r = .22, p < .001$ ), 愛着性とは負に相関していた ( $r = -.15, p < .05$ )。情動性、外向性、統制性とは関連がみられなかった (順に  $r = .10, .06, -.02, n.s.$ )。

自尊感情の 5 因子性格検査との関連については、情動性と比較的高い負の相関関係を示し ( $r = -.53, p < .001$ ), 外向性 ( $r = .33, p < .001$ ), 愛着性 ( $r = .21, p < .01$ ), 統制性 ( $r = .26, p < .001$ ) とは正に相関していたが、遊戯性とは関連がみられなかった ( $r = .06, n.s.$ )。

5 因子性格検査の下位尺度間については、遊戯性が情動性および愛着性と無相関 (順に  $r = .02, .10, n.s.$ ) であった他は、 $r = -.15 \sim .44$  の有意な相関関係が示された。

**有能感の類型化**

相関分析において仮想的有能感と自尊感情が独立する概念であることが本研究においても確認されたため、分析対象者をそれぞれの中央値 (順に  $Mdn = 30, 29$ ) を基に高群と低群に分け、Figure 1 にしたがって有能感を四つに分類した。いずれの得点も中央値より高かった者を全能型 ( $n = 53$ ), 低かった者を萎縮型 ( $n = 62$ ),

**Table 2** 尺度間の相関係数

	仮想的 有能感	自尊 感情	5 因子性格			
			情動性	外向性	愛着性	統制性
自尊感情	.08					
5 因子性格						
情動性	.10	-.53 ***				
外向性	.06	.33 ***	-.27 ***			
愛着性	-.15 *	.21 **	-.27 ***	.44 ***		
統制性	-.02	.26 ***	-.26 ***	.17 **	.31 ***	
遊戯性	.22 ***	.06	.02	.20 **	.10	-.15 *

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

仮想的有能感得点のみ高かった者を仮想型 ( $n = 58$ ), 自尊感情得点のみ高かった者を自尊型 ( $n = 58$ ) として4群に分けた。

#### 有能感類型による性格特性の差異

有能感の4類型を独立変数とし、精神的健康、認知スタイル、自我防衛スタイル、5因子性格検査の下位尺度得点を従属変数とした1要因分散分析を行った (Table 3)。その結果、情動性 ( $F(3,227) = 17.88, p < .001$ ), 外向性 ( $F(3,226) = 6.22, p < .001$ ), 統制性 ( $F(3,226) = 5.95, p < .001$ ), 愛着性 ( $F(3,226) = 6.70, p < .001$ ), 遊戯性 ( $F(3,225) = 4.02, p < .01$ ) 全てにおいて類型の効果が認められた。

HSD法による多重比較の結果、仮想型および萎縮型は全能型および自尊型よりも情動性が高かった。逆に、萎縮型および仮想型に比べ、全能型は外向性および遊戯性が高く、自尊型は愛着性および統制性が高かった。さらに、自尊型は萎縮型に比べて外向性も高かった。

#### 仮想型の特徴

HSD法による多重比較の結果を仮想型とその他の類型との比較から整理すると、以下のようにまとめられる。

(a) 仮想型と自尊型の違い (すなわち、他者軽視傾向および自尊感情による有能感の違い) については、情動性、愛着性、統制性においてみられた。仮想型は自尊型と比べて情動性が高く、逆に愛着性および統制性が低い。

(b) 仮想型と萎縮型の違い (すなわち、自尊感情が低い者の他者軽視傾向の違い) については、いずれの特性においてもみられなかった。

(c) 仮想型と全能型の違い (すなわち、他者軽視傾向が高い者の自尊感情の違い) については、情動性および外向性においてみられた。仮想型は全能型と比べて情動性が高く、逆に外向性が低い。

#### 【考察】

本研究では、他者を見下す若者たちの性格的特徴に関する知見の積み重ねを目的として、大学生を対象に5因子性格検査を用いて仮想的有能感との関連について検討を行った。

他者軽視傾向は、愛着性および遊戯性とは有意な相関関係を示した一方、情動性、外向性、統制性とは関連がみられなかった。愛着性は、他者への温厚な振る舞い、協調的・共感的態度、信頼・尊重を表す項目から構成されており、負の相関関係がみられるのは納得のいくものである。遊戯性と正の相関関係を示したのは、空想傾向や内的経験への敏感性を測定する項目が含まれるためかもしれない。田中・佐藤・境・坂野 (2007) によれば、自己注目は不安を導き、不安を媒介することで抑鬱につながる可能性があるという。遊戯性は、神経症患者の性格を記述する上で有用な特性とされている (川西・辻, 1998)。自己の内面に注意を向ける傾向が強いということは、自己評価に対する不安感を高めるため、他者を軽視することによって安心しようとする、仮想的有能感の生起メカニズムの前提条件となりうるのかもしれない。

ただし、心配性、緊張、抑鬱、自己批判、気分変動といった傾向を測定する情動性と無相関であったことは、一見矛盾する結果である。しかしながら、活動性やリーダーシップ、群居や注意獲得欲求といった項目からなる外向性とも、責任感や几帳面さ、努力や計画的行動を測定する統制性とも無相関であった結果を考え併せると、他者軽視傾向の顕著な者たちに自信のある個人も自信のない個人も混在するためであろうと推察される。過去の知見 (速水他, 2005; 小平・小塩・速水, 2007; 山田・速水, 2004) と同様に、他者軽視傾向が自尊感情と無相関であることが本研究で示されたのも、それを裏付けるものといえよう。

本研究では、仮想的有能感を有する者の典型を抽出

Table 3 5因子性格検査得点の有能感類型別平均値 (標準偏差) および得点差

	萎縮型 $n=62$	自尊型 $n=58$	仮想型 $n=58$	全能型 $n=53$	$F$	多重比較 <sup>注1</sup>
情動性	36.37 (5.74)	30.91 (6.36)	37.41 (6.55)	30.96 (6.17)	17.88 ***	自・全 < 萎・仮
外向性	28.89 (6.59)	32.43 (6.74)	29.14 (7.35)	33.43 (7.16)	6.22 ***	萎 < 自・全, 仮 < 全
愛着性	33.74 (7.05)	37.00 (5.26)	32.55 (5.77)	34.60 (5.12)	5.95 ***	仮・萎 < 自
統制性	29.32 (6.65)	33.41 (4.91)	28.88 (6.41)	31.28 (6.34)	6.70 ***	仮・萎 < 自
遊戯性	34.03 (5.76)	34.76 (5.87)	35.86 (5.97)	37.58 (5.20)	4.02 **	萎・自 < 全

\*\*\*  $p < .001$  \*\*  $p < .01$

注1) 萎: 萎縮型, 自: 自尊型, 仮: 仮想型, 全: 全能型

すべく、他者軽視傾向と自尊感情の高低を組み合わせた有能感の4類型にしたがい、分析対象者を分類した。仮想型に属する個人、すなわち他者軽視傾向が強く自尊感情が低い者は、情動性が最も高く、逆に愛着性および統制性が最も低いことが明らかとなった。他者軽視傾向が弱く自尊感情が高い自尊型においては、情動性が最も低く、逆に愛着性および統制性が最も高いという仮想型とは全く逆のパターンが認められた。精神的健康に関する研究領域では、情動性がネガティブな情緒の最大規定因となること、愛着性が対人場面、統制性が達成場面における成功経験の可能性を高め、それぞれの領域における満足感につながることで、などが共通認識となりつつある (DeNeve & Cooper, 1998; Steel, Schmidt, & Shultz, 2008)。さらに、他者を信頼し他者から信頼される互恵的關係には、愛着性と統制性の両方が必要となろう。したがって、情動性の高さと共に、愛着性および統制性の低さは、自身の精神的健康に悪影響を及ぼすと考えられる。仮想的有能感と日常の対人関係における感情経験との関連を検討した小平他 (2007) は、仮想型は出来事を悪く捉え、強い抑鬱や敵意を感じ、その感情の変動が大きい傾向が自尊型と比べて顕著であった結果を報告している。本研究の結果もこれに整合的であり、円滑な社会的相互作用にとっても、学業や仕事上の成功にとっても、さらには自身の精神的健康にとっても、自尊型が最も望ましく、仮想型が最も望ましくないと考えられる。

また、小平他 (2007) は、自尊感情と抑鬱傾向、他者軽視傾向と敵意感情の対応関係も示唆している。本研究において、自尊感情が同様に低い仮想型と萎縮型は、自尊感情が同様に高い自尊型と全能型よりも有意に情動性が高いという結果がみられたことは、自尊感情の低さが抑鬱傾向につながる危険性を追認するものといえる。加えて、そもそも仮想型と萎縮型の差異はいずれの性格特性においてもみられず、先の仮想型と自尊型の対比も考え併せれば、仮想型に属する個人は実際の成功経験や社会的承認を得る機会に乏しく、精神的健康の向上を図るために他者を批判的に評価することによって有能さの感覚を得ようとするという、仮想的有能感の自我防衛的な意味合いを間接的に支持する結果といえよう。

なお、仮想型と全能型は、他者軽視傾向は同様に高く、その違いは自尊感情の高さにある。本研究の結果からは、全能型の遊戯性が最も高く、次いで仮想型の得点が高かった。上述の相関分析の結果でも、他者軽視傾向は遊戯性と正に相関していた。ただし、情動性および外向性において両者に差異がみられている。ここから、全能型は仮想型と同じく自己の内的経験に敏感であり空想・思考もよくめぐらせるものの、仮想型

とは異なり、それが情動性の高さ、すなわち不安や抑鬱につながっていないことが示唆される。加えて、全能型は外向性も最も高く、大勢に囲まれて賑やかに過ごしたり、リーダー的な存在となる機会も多いと考えられる。全能型は、自尊感情が同様に高い自尊型とは遊戯性が異なるのみである。

他者を批判的に評価したり、軽視するのは決して望ましい傾向とはいえない。ただし、実際の成功経験や社会的承認に基づいた肯定的な自己評価を有していれば、他者が劣っていると感じることはなくはない(それを相手にぶつけるかどうかは、また別の問題である)。しかし、それに見合う能力が自分に備わっているわけでもないのに、他者軽視によって一時的に安心してみたところで、真の満足感や有能感をもたらしてはくれない。一方で、仮想的有能感が自我防衛的な意味合いを持つと考えられる以上、他者軽視は良くないと無理にやめさせてしまえば、自己は萎縮するのみである。したがって、まずはいかに仮想型に属する個人の自尊感情を高めるかを講じていく必要がある。冒頭で述べたように、競争意識が蔓延する現代社会において、自尊感情を高めることは難しい。誰かが勝てば、必ず誰かが負ける。そのため、競争によらない成功、それに伴う自己評価の向上について、検討を進めることが今後の課題である。また、人の性格は一日片時に変わるものではないが、肯定的な自己評価を長く維持することにより、情動性の低下、外向性・愛着性・統制性の向上が期待できるかもしれない。

#### 【引用文献】

- DeNeve, K. M., & Cooper, H. (1998). The happy personality: A meta-analysis of 137 personality traits and subjective well-being. *Psychological Bulletin*, *124*, 197-229.
- FFPQ研究会 (代表: 辻 平治郎) (2002). 改訂 FFPQ (5 因子性格検査) 北大路書房
- 藤島 寛・山田尚子・辻 平治郎 (2005). 5 因子性格検査短縮版 (FFPQ-50) の作成 パーソナリティ研究, *13*, 231-241.
- 速水敏彦 (2006). 他人を見下す若者たち 講談社現代新書
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2004). 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), *51*, 207-213.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2005). 他者軽視に基づく仮想的有能感—自尊感情との比較から— 感情心理学研究, *12*, 43-55.
- Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E-H. (2004). Assumed-competence base on undervaluing others as a determinant of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, *5*, 127-135.

- 速水敏彦・小平英志 (2006). 仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連 パーソナリティ研究, **14**, 171-180.
- 川西文子・辻 平治郎 (1998). 神経症患者のパーソナリティ特性 辻 平治郎 (編) 5 因子性格検査の理論と実際 北大路書房 (pp. 107-172)
- 香山リカ (2004). <私>の愛国心 ちくま新書
- 小平英志・小塩真司・速水敏彦 (2007). 仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験—抑鬱感情と敵意感情のレベルと変動性に注目して— パーソナリティ研究, **15**, 217-227.
- 村上宣寛 (2003). 日本語におけるビッグ・ファイブとその心理測定的条件 性格心理学研究, **11**, 70-85.
- 村上宣寛 (2005). 「心理テスト」はウソでした。 日経 BP 社
- 大野木裕明 (2004). 主要 5 因子性格検査 3 種間の相関的資料 パーソナリティ研究, **12**, 82-89.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山 緑 (1999). NEO-PI-R, NEO-FFI 共通マニュアル 東京心理
- Steel, P., Schmidt, J., & Shultz, J. (2008). Refining the relationship between personality and subjective well-being. *Psychological Bulletin*, **134**, 138-161.
- 高木邦子 (2006). 仮想的有能感と性格—YG 性格検査と自己認識欲求からの検討— 東海心理学会第 55 回大会発表論文集, 55.
- 田中誠一・佐藤 寛・境 泉洋・坂野雄二 (2007). 自己注目と抑うつおよび不安との関連 心理学研究, **78**, 365-371.
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, **67**, 61-67.
- 山田奈保子・速水敏彦 (2004). 仮想的有能感と性格検査との関連—16PF との関連から— 日本パーソナリティ心理学会第 13 回大会発表論文集, 100-101.